

小学生の学校生活意識と自己肯定感との関連

吉川 はる奈 埼玉大学教育学部生活創造講座
奥 隅 成 美 埼玉大学教育学部生活創造講座

キーワード：小学生、生活、自己肯定感、喜び、質問紙調査

1. はじめに

日本の子どもは諸外国の子どもたちと比べ、意欲や自己肯定感が低いと言われている。2003年のPISA調査では、「学習に主体的に取り組む意欲・態度」に関する項目で、日本の子どもたちの中で肯定的な回答をした割合はOECDの平均と比べて低かった。2012年の調査では、数学の興味関心についての調査が行われ、2003年より肯定的な回答の割合は増えたが、それでもOECDの平均と比べると低い結果となり、日本の子どもたちの学習意欲の向上はこれからの教育課題とされている。また内閣府の平成26年度版「子ども・若者白書」によると、「上手くいくかわからないことに対し意欲的に取り組む」と答えた割合が、諸外国は60～80%なのに対し、日本の若者の割合は52.2%と低かった。このことから日本の若者の意欲の低さがうかがえる。

日本の子どもたちの自己肯定感については、内閣府の平成26年版「子ども・若者白書」によると、日本の若者のうち、自分に満足している割合は45.8%、自分には長所があると思っている割合は68.9%で、いずれもほかの国に比べ日本が最も低くなっていることが分かっている。特に10代後半から20代前半にかけて差が大きくなっている。また、国立青少年教育振興機構が実施した、「高校生の生活と意識に関する調査—日本・米国・中国・韓国の比較—」という調査では、「自分はダメな人間だと思うことがある」という質問で中国56.4%、米国45.1%、韓国35.2%に比べ、日本は72.5%と4か国で一番高かった。このことから日本の若者の自己肯定感が低いことが危惧される。実際に学校現場では、子どもたちの中には、「勉強したくない」と学校の宿題をやらずに遊んでしまう子や、授業に全く集中できず机で寝てしまう子、図工の授業で「絵が苦手だから描きたくない」と発言する児童など、自信のなさが授業への意欲へ影響していることが分かる。もちろんクラスには日々楽しそうに様々なことに積極的に取り組んでいる子どももいる。

全ての子どもが現代の自分が置かれている状況に、不安や寂しさつまらなさを抱いているわけではない。生き生きとした表情で自らの夢を多く語り、楽しそうに学校生活を送る児童にも多く出会う。時には人間関係に悩みながらも、友だちと協力し合う力を身に付け、ひとつひとつの壁を乗り越えている姿にもである。

学校生活は子どもたちの生活の中で大半の時間を占めるものである。毎日の学校生活の中で子どもたちは何を楽しみに学校へ通っているのだろうか。学校が毎日楽しいと通う児童もいれば、学校が楽しくない、学校に行きたくないと感じながら通っている児童もいるだろう。学校が楽しいと思える児童と思えない児童にはどんな違いがあるのだろうか。

そこで本研究では小学生が学校を楽しいと感じる要因や、学年による変化、自己肯定感との関連についても検討する。

2. 方法

(1) 調査方法

質問紙調査法。研究の趣旨に関して説明し、了解を得たうえで、行った。

(2) 調査対象

表1 調査対象一覧

	2年	4年	6年	計
公立T小学校	84	90	84	258 人

表1のとおり2年生、4年生、6年生を対象に質問紙調査を行った。計258人から回答を得た。

(3) 調査期間

2016年6月～7月

(4) 調査内容

質問紙の内容は予備調査を基に、主に学校や生活に対する意識や、好きな教科について尋ねる質問項目(自由記述を含む)を作成した。また小学生の自己肯定感の特徴を明らかにするための質問も行うことで、自己肯定感と学校での楽しさや意識との関係も明らかにする。予備調査、先行研究、また子どものQOL (Quality of Life) 尺度をはかる指標である「KINDLR」の日本語訳「小学生版QOL尺度」の項目等も参考に、質問紙を作成した。質問項目は担任教員にも確認し作成した。

(5) 分析方法

分析は、SPSS を用い統計処理を行った。また、自由記述欄はKJ法を用いて分類を行った。

3. 結果

(1) 小学生が答える学校の楽しさ

「あなたはどれくらい学校が楽しいですか」という質問で、「学校が毎日楽しい」と答えた割合が一番大きかったのは2年生で、全体の54%が普通の学校生活を楽しく感じていると答えた。この割合は学年が上がるにつれて低くなり、4年生は全体の48%、6年生は39%であった。また男女差を見ると、各学年とも女子の方が、毎日学校が楽しいと回答する割合が高かった。特に2年生女子は59%、4年生女子は52%と半数以上は毎日学校が楽しいと答えていた。

「週に2、3日楽しい」と答える割合は学年が上がるごとに高くなり、2年生は19%、4年生は31%、6年生は38%であった。「ほぼ毎日楽しい」の回答と合わせると、2年生は73%、4年生は79%、6年生は77%であった。

「月に2、3日楽しい」と答える割合は学年が上がるごとに低くなり、2年生は17%、4年生は6%、6年生は1%であった。「ほぼ毎日楽しい」「週に2、3日楽しい」とあわせると、2年生は90%、4年生は85%、6年生は78%と普通の学校生活で楽しさを感じている割合は学年が上がるごとに低くなっていた。

「行事の時だけ楽しい」と答えた割合は、6年生が一番高く15%、4年生と2年生は、4年生が8%、2年生は7%とあまり差はなかった。6年生では行事に学校での楽しさを感じている児童が多いことが分かった。

「学校が楽しいとはあまり思わない」と答える児童の割合は、2年生では4%、4年生は5%、6年生は7%と学年が上がるほど若干割合は増えていた。学年が上がるにつれ、「学校が楽しい」と思う頻度が少なくなっていた。

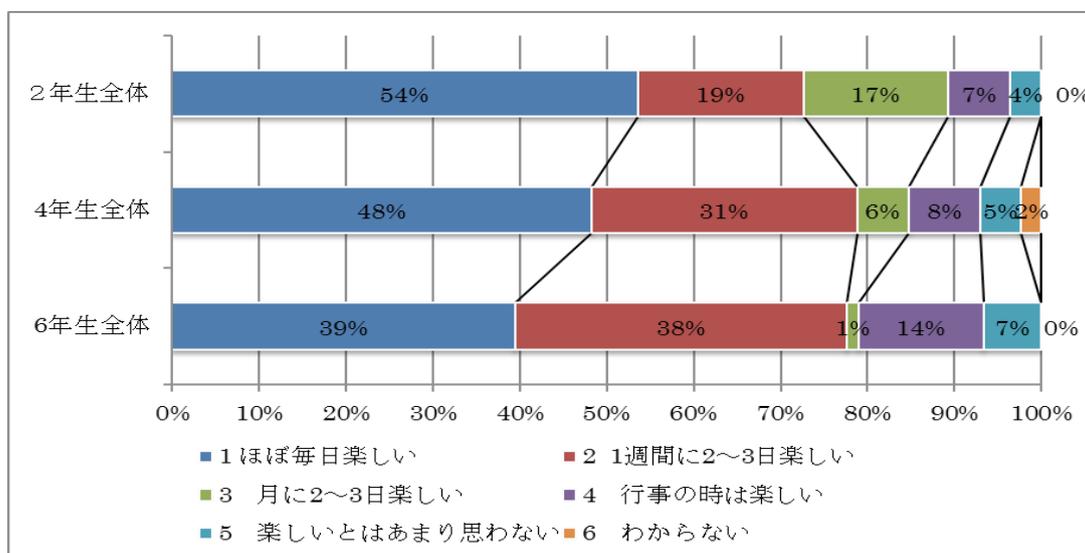


図1 学校はどのくらい楽しいか

(2) 学校での楽しい時間：学年による違い

「あなたが学校の中で楽しいと思う時間は何の時間ですか」という質問に、各学年上位3位まで回答してもらった。1位～3位までの回答の割合を合わせると2年生、6年生で一番多かった回答は「休み時間・お昼休み」であり、4年生は「クラブ活動」であった。4年生でクラブ活動が人気なのは、ちょうど4年生からクラブ活動が開始されたことが影響しているのではないかと考える。いずれも子どもたちが自由に遊んだり、好きな事ができたりする時間を楽しいと感じる児童が多いようだった。

2年生では1年生から6年生まで縦割り班でお昼休みを使って遊ぶ時間が楽しいと答える割合が他の2つの学年より多かった。定期的な他学年との交流はこの交流タイムが主である。普段はかかわりが少ない上級生に遊ぶ交流タイムは低学年にとって楽しい時間であるのだろう。

6年生では「クラブ活動」が2番目に多い回答であった(図2)。また「特にない」という回答が他の学年より多く、学校での楽しい時間がなかったり、1つ2つしかなかったりする児童が多いことが分かった。

学年での変化に注目すると、「行事」が楽しいと答える割合が2年生では6%、4年生では21%、6年生では28%と学年が上がるごとに増えていた。

このことからどの学年も「休み時間・お昼休み」や「クラブ活動」などの時間が楽しいと感じており、学年が上がるごとに「行事」が楽しいと答える割合が増えていた。

(3) 1日の中で楽しい時間

学校での時間だけでなく、1日の中で楽しい時間についての回答を分類した。特徴的なのは、6年生の女子で、2年生、4年生、6年生男子とは異なり、回答が分散し、多様さが目立った。つまり、1日のなかで楽しいと感じる時間が6年女子は個々で異なり多様な傾向がある。

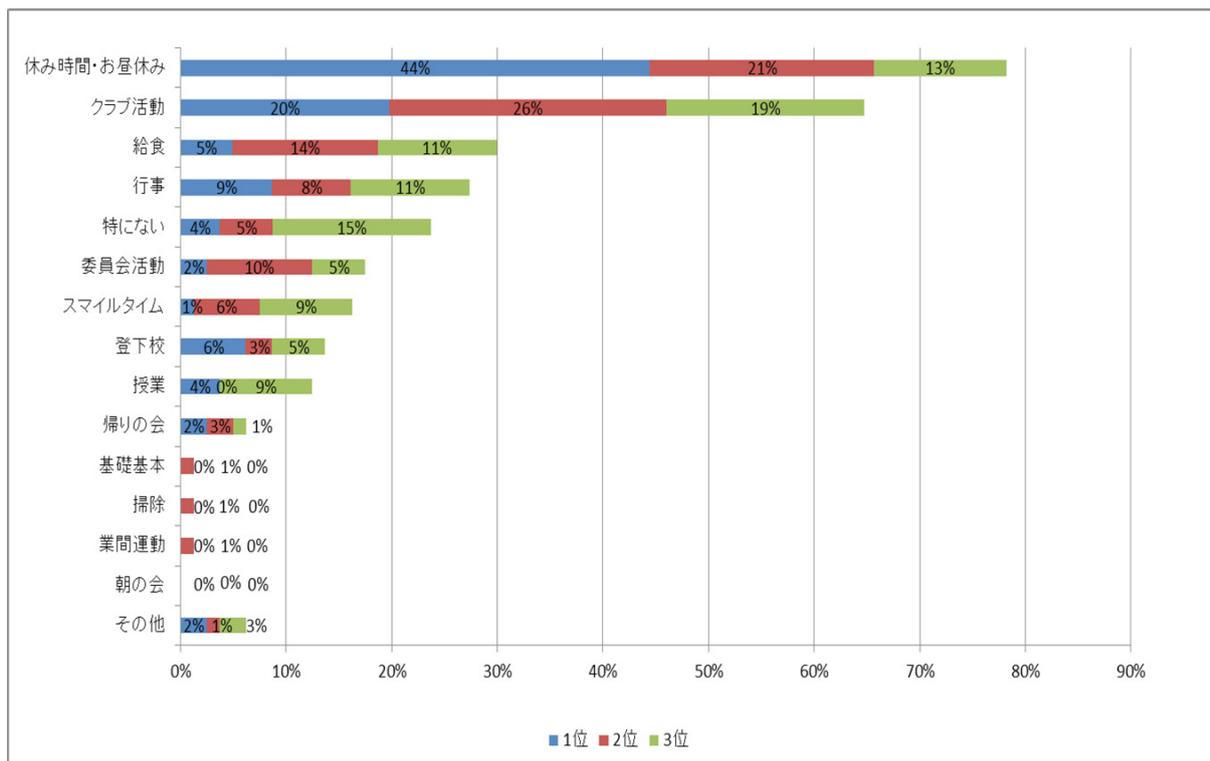


図2 6年生が学校で楽しい時間

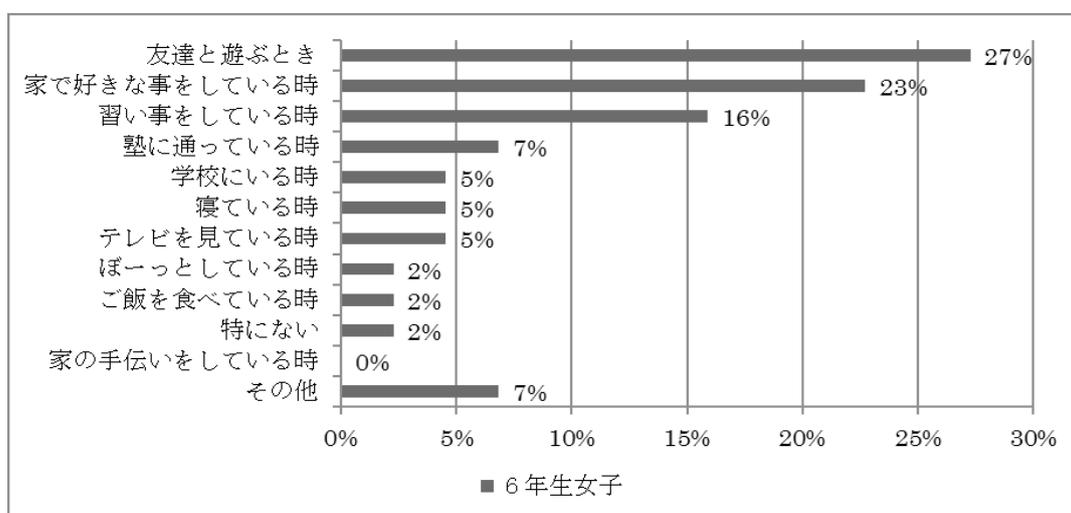


図3 6年生女子が回答した1日で楽しい時間

(4) 得意なことがあることと自分のことが好きであること

「自分のことが好き」群と「自分のことが嫌い」群との「得意なことはあるか」への回答を比べた。「たくさんある」「少しある」と答えた割合はどの学年も「自分のことが好き」群の方が多かったことが分かった。「自分のことが嫌い」群で多かった回答は「分からない」であった。また「自分のことが好きか」と「得意なことはあるか」との関係を見るためにスピアマンの相関分析を用いて相関関数を算出したところ、4年生では0.287、6年生では0.618と正の相関が見られ、6年生が一番関係が強いことが分かった。「自分のことが好き」群と「自分のことが嫌い」群の「得意なことはあ

るか」への回答の平均値の差についてt検定を行った。どの学年も $p < 0.05$ となり有意差が見られた。「自分のことが好きか嫌い」と「得意なことがあるか」には相関が見られ、学年が上がるごとに関係は強くなっていた。また「自分のことが好き」と思っている児童ほど「得意なことがある」と思っていることが示された。

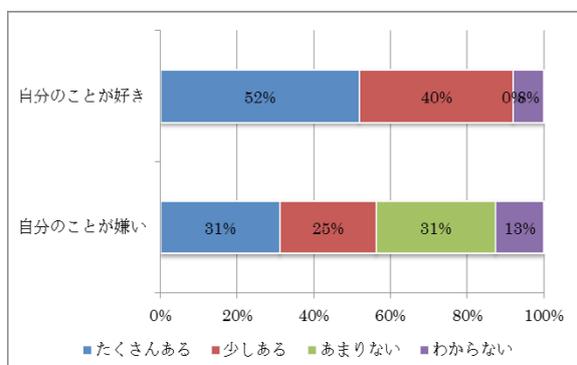


図4 得意なことはあるか (2年生回答)

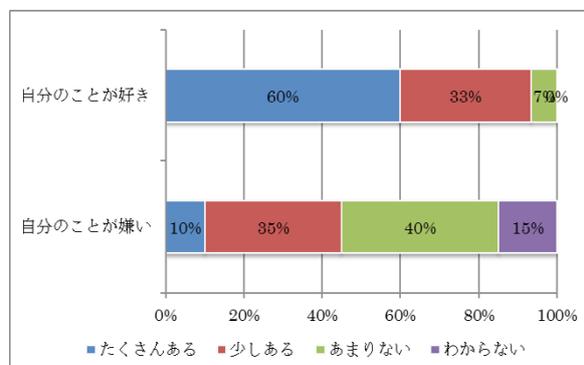


図5 得意なことはあるか (6年生回答)

(5) 役に立ったことがある経験

「自分のことが好き」群と「自分のことが嫌い」群との「役に立ったことはあるか」への回答を比べた。「たくさんある」「少しある」と答えた割合はどの学年も「自分のことが好き」群の方が多かった。「自分のことが嫌い」群で多かった回答は「分からない」であった。また「自分のことが好きか」と「役に立ったことはあるか」との関係を見るためにスピアマンの相関分析を用いて相関関数を算出したところ、2年生では0.407、4年生では0.644、6年生では0.652と、いずれの学年も正の相関が見られ、6年生4年生は特に関係が強いことが分かった。さらに、「自分のことが好き」群と「自分のことが嫌い」群の「役に立ったことはあるか」への回答の平均値の差は有意であるか、t検定を行った。どの学年も $p < 0.05$ となり、有意水準5%で有意差が見られた。このことから「自分のことが好きか嫌い」と「役に立ったことはあるか」には相関が見られ、学年が上がるごとに関係は強くなっていた。また「自分のことが好き」と思っている児童ほど「役に立ったことがある」と思っていることがわかった。

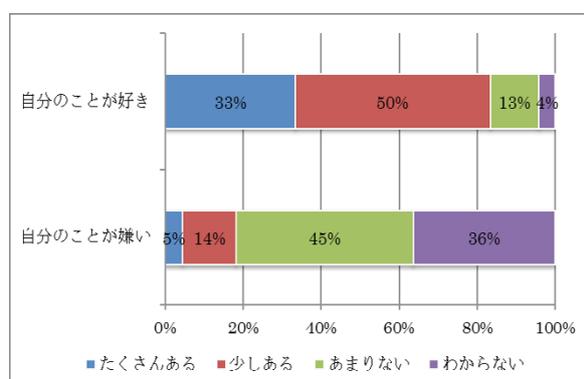


図6 役に立ったことがあるか (4年生回答)

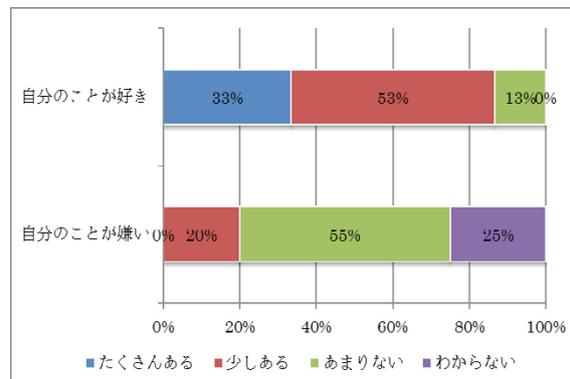


図7 役にたつたことがあるか (6年生回答)

4. 考察

(1) 学校生活のなかでの友達の存在

質問紙調査の結果から、2年生、4年生、6年生合わせて36%の児童が「友達と遊ぶ時」が1日の中で1番の楽しみだと回答している。また、「学校で楽しみなことは何ですか」という質問にほとんどの児童が「休み時間・お昼休み」と答えている。実際に小学校で休み時間やお昼休みになると、子どもたちのほとんどは外へ行き、友達同士で色んな遊びをしている。2年生のクラスでは、「遊び係」という係りがある。係の児童が休み時間にみんなで遊べる遊びを提案し、クラス全員で遊ぶ。給食時に係が今日はどんな遊びをするか発表するのだが、他の児童は「今日はなにやるの?」、「どこ集合なの?」と楽しそうに聞いている様子を見られた。子どもたちにとって、休み時間や昼休みは友達と遊べる時間であり、毎日の生活の中でも楽しみなことの大きな一つになっているのではないかと考える。また、「学校に行く理由」を尋ねると「友達に会えるから」学校へ行くと答えた割合が一番高く、4年生、6年生合わせて39%であった。友達の存在が学校へ行きたいと思う意欲に大きく関わっていることがわかる。

このことから、小学生にとって友達の存在はとても大きなものであることが分かる。石山(2013)は「児童にとって幸福は、『友だち』という存在、あるいは『遊び』単体ではなく、『友だちと遊ぶこと』であり、どちらも同じくらい重要であることがわかった。また学校生活においても、共に学び、共に生活する中で、さまざまな思いを共有する『友だち』の存在が大きく、対人関係が良好なことが、学校生活を充実させる大きな要因となっていると考えられる」と述べている。つまり、友達の存在が児童に幸福感や学校生活での充実感をもたらしているということである。

小学生にとって学校とは友達と会える場所である。友達と一緒に遊んだり、話をしたりすることができることが学校の楽しさに繋がっていると考えられる。また國枝ら(2006)は「友達の中でも、親密性が高い友達が増えるのは、男女ともに児童期中期から後期にかけてであることが明らかになった」と述べている。学年が上がるにつれ、友達との仲もより親密になり、友達との関係が児童にとって重要になっていくと考えられる。

(2) 児童を支える家族の存在

家族とは、いつの時代も子どもにとっての1番の居場所であり、心の拠りどころである。そして親は、子どもを温かく見守り、見えないところで支えていくかけがえのない存在である。その家族からたくさんの愛情を受け取ることが、子どもののびのびとした成長を促していく。

本研究においても児童にとって家族の存在の大きさが顕著に現れた。「うれしいこと」についての自由記述において家族に関連した回答が多く、児童がいかに家族の支えを必要としているのかがうかがえた。

「家族といっしょにいること」というストレートな回答はもちろん、「家族でごはんを食べるとき」、「家族と話しているとき」という日常における家族間で行われる行為についてあげる児童は多い。4年生では、「家族で旅行にでかけること」という家族と過ごす特別な時間についての記述も多くみられ、楽しい時間を家族で共有することに喜びを感じていた。中には、「いつもお母さん、お父さんが笑顔で姉もみんな楽しく過ごしている時」や、「家族が幸せな時」など、家族の中の幸福は児童のうれしさ、喜びに大きな影響を与えていた。

平井・岡本（2001）は、小学生高学年の児童を対象とした食事中のコミュニケーションと家族の健康性との関係を検討した結果、健康な家族においては、食事場面での親子のコミュニケーションの質と量が、子どもと親との心理的結合性を強化することを示唆している。このように、家族とのコミュニケーションは、児童において身体的な健康だけではなく、精神的な安定においても影響があることが考えられる。

児童は日常生活の中で家族の大切さを感じており、家族と一緒に過ごすことに喜びを感じている。現代では、核家族が多くなっていることや、少子化により子どもが少なくなっていること、地域との結びつきが弱くなってきていることに加え、家族の支えを得られない事情を抱える子ども、貧困の問題なども山積している。子どもの成長に必要な家族の問題、課題への対応が必要である。子どもは社会で育てるといふ実質的な取り組みが求められている。

（3）活躍する経験が児童の自信へと繋がる

「学校で楽しい時間」を尋ねた結果では、学年が上がるごとに「行事」と答える割合が高くなっていった。これは学年が上がるにつれ、行事での役割が増えたり、高学年としての自覚が芽生え行事に対する意欲が上がったりするからではないかと考えられる。小学校では、運動会では係や鼓笛隊などの活動、組体操など高学年にならないと参加できない競技がある。また陸上記録会やサッカー大会など、6年生だけが参加できるスポーツの大会もある。休み時間や放課後に練習している姿を見るとどの児童も生き生きとした表情で練習をしていた。またこのように高学年になると高学年だけの行事があったり、行事の中での役割が広がったりと、低学年や中学年では体験できないことがある。また「学校がどれくらい楽しいですか」という質問で、6年生はほかの学年に比べ、「行事だけ楽しい」と答える割合が高かった。高学年になると、勉強が難しくなったり、友人関係で上手くいかないことがあったりすることもあるだろう。そんな中で行事は高学年が活躍できる場である。こうした活躍した経験が児童に充実感を与え、楽しさに繋がるのではないだろうか。活躍したという経験がないと、学校生活の中で達成感や充実感を得られず、「楽しい」と思う機会を逃してしまう。こういう機会がないことが「学校で楽しい時間」を尋ねたときに「特にない」と感じてしまうことにつながるのではないだろうか。教員はどの児童にも達成感や充実感を得られるように支援を行う必要がある。児童の能力によってその児童ができそうな目標を定めたり、その児童の能力を発揮できたりするような役割を与えることで児童はそれを達成し自信にすることができる。

行事でなくても日々の係活動や委員会活動、授業中でも児童が活躍する場はある。「役に立ったことはあるか」という質問で、「係や当番の仕事で役に立ったことがある」と答える児童が各学年15%ほどいた。「学校で楽しいと思う時間」に「係や当番の仕事をしている時」や「委員会の時」と答える児童の割合は低かったが、「学校がどれくらい楽しいか」と「役に立ったことはあるか」に対する回答には相関が見られ、「学校が楽しい」と答える児童ほど、「役に立ったことがある」と回答していた。こうした活動も児童に人の役に立ったという自己有用感を感じさせ、自分への自信につながっていくのではないだろうか。

自分に自信を持つことは、学校生活を充実させるうえで重要なことであろう。2年生女兒が「先生、最近算数が好きになったの」と話しかけてきた。理由を聞くと「だってね、お母さんがこれ（たし算）とか教えてくれて、分かるようになったから」と言っていた。この児童は算数のドリルをやる時間には「分からない」とよく質問をしてきた。児童は「これであってる？」と一問一問正解か

どうか確認していた。問題がちゃんと解けているか不安を感じているようだった。しかし母親との家庭学習で自信がついたのか、「算数が好きになった」と発言していた。このように苦手意識や嫌いだと思っていることは児童に不安を感じさせ、積極的に取り組めなくさせることもある。しかしその苦手なことが「できた」「分かった」という体験に変わることで児童に自信を持たせる。自信を持つことで、「苦手だな」、「嫌いだな」と感じていたことが「できるようになった」、「好き」とポジティブな感情へと変化するのだろう。この感情こそが学校の楽しさにつながるのではないだろうか。

(4) 喜びの対象は「与えてもらうもの」から「自ら掴むもの」へ

記述の中で4年生と6年生を比べると、4年生では「何かを買ってもらった」「何かをしてもらった」というような、目に見えるかたちで誰かから「与えてもらう」形のものへの喜びが多かったが、一方で6年生では「コンクールで賞をとった時」、「選手に選ばれたとき」など、自らの努力や行動により得られる達成感を始め、「ふつうの生活が不自由なくできているとき」、「思い通りになったとき」など、生活に対する満足感について答えた児童が多くなった。学年が上がるにつれて、与えられてきた受け身の喜びよりも、自ら努力して成し遂げた成果や、毎日を健康に生きていられることに感謝し、何もない日常生活にこそ見いだすことができる喜びを、能動的に感じるようになってくるのではないかと推測する。

草下(2010)は、「達成感とは成し遂げることであり、目的を達し成功することである。従って、達成感とは言うまでもなく自己の設定した目的を成就したときに感受する心情であり、感動する心の様態を意味する。」という。努力を重ねれば必ず成功するとは限らないが、児童にとって目的を成就し、達成感を味わうことは次の段階へ挑戦することへ繋がり、児童自身のやる気や活力に結びつくであろう。学校や家庭、地域で児童が「できるようになった!」、「成功した!」というような、児童自身が主体的に行動し、自らの目標を達成していくことの喜びを味わう機会を増やしていくの重要性があらためて示唆された。

謝辞

本研究をおこなうにあたり協力いただきましたすべてのみなさまに感謝申し上げます。

引用文献

- ・第3回学習基本調査 小学生版 第1章 小学生の学習に対する意識・調査—「学習に関する意識・実態調査の分析より」—
- ・杉村 健(心理学教室):「小学生の各教科のやる気と好き・嫌い」奈良教育大学教育研究所紀要1995 31, P139-150,
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 生活指導・進路指導研究センター 生活指導リーフ「自尊感情? それとも「自己有用感」? (平成27年3月)
- ・内閣府 平成26年版 子ども・若者白書 特集 1 自己意識
- ・国立青少年教育振興機構:「高校生の生活と意識に関する調査—日本・米国・中国・韓国の比較—」
- ・「自尊感情や自己肯定感に関する研究—幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方—」東京都教職員研修センター紀要(8), 3-26, 2009-03
- ・河越麻佑、岡田みゆき:「大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因」日本家政学会誌 Vol.66 2015 P.222-233

- ・菅原すみ：お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム 格差センシティブな人間発達科学の創成 1 巻「子ども期の養育環境とQOL」金子書房 2012
- ・A. W. ポープ S. M. ミッキヘイル W.E.クレイグヘッド 共著 高山 巖 監訳 佐藤正二・佐藤容子・前田健一 共訳：自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる—1992 P.2-8
- ・杉本希映, 庄司一子「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化, 教育心理学研究54, 289-299, 2006.

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)

A study on the relationship between self-affirmation and the consciousness about elementary school life

YOSHIKAWA, Haruna

Faculty of Education, Saitama University

Okuzumi, Narumi

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Purpose: Some point that many elementary school students feel the school is not fun. Elementary school in Japan has various time, for example events time and off-campus time learning outside the classroom. When elementary school students feel fun in school? I examine the relationship between self-affirmation about school time and feeling for elementary school. The questionnaire, referring to preliminary investigations and studies, was conducted. Favorable attitudes to school with elementary school students is related to a self-affirmation in the survey.

Method: We did a survey questionnaire. The children reported on their self in the survey. Total 258 elementary school students, second, fourth and sixth grade students in public elementary schools conducted survey. It was investigated during the period in 2016.

Result: 1) 54% second grade students answered “the school is fun” and 39% sixth grade students so. 2) They answered lower percentage, feeling the school is fun, according to grade.

3) They answered that school is fun only when the school event and most sixth grade, so sixth grade have strong expectations of events and attitudes in schools.

Keywords: elementary school students, life, self-affirmation, consciousness, questionnaire